

実践報告

来館者の持っている力を引き出す①

— コレクション展『なぞなぞ美術館』の試み —

鈴木 有紀

1 はじめに

学芸員として「博物館」⁽¹⁾で仕事をするようになってから、展示室を主なフィールドに、「来館者の主体的な学びのあり方」について探ってきた⁽²⁾。その取掛かりとして始め、今も学び続けているのが、①「博物館」スタッフと来館者がコミュニケーションを重ねながら資料や作品について理解を深めていくワークショップ—特に「対話型鑑賞」の考え方と、②その中で展開される「博物館」スタッフのナビゲーション（ファシリテーション）の在り方である⁽³⁾。しかしその一方で、活動日時や定員等の制限に縛られず、来館者が来たい時に「博物館」を訪れ、自分のペースで学びを進めていける「展示」を創ることが出来ないかとその可能性について考えてきた。そのような中で出会ったのが、日本に「対話型鑑賞」を紹介した国外の専門家の一人であり、元ニューヨーク近代美術館のエデュケーター（同館の教育部門を担当する専門スタッフ）で美術史家のアメリア・アレナスの次の言葉である⁽⁴⁾。

これまでのやり方や経験に縛られないで、来場者のもっている能力を引き出せるような、別のやり方を探ってみるのは十分に意味がある。また実際に世界各地の美術館で、今もこうした試みに意欲的にとりくんでいる人々がいる。たとえば2001年バルセロナで開かれる現代美術の大規模な展覧会では、展示品の約半分に、1つではなく7つのラベルが添えられることになった。ラベルは作品の脇に映写機を使って投影され、来場者はこれを読めば、ただ学芸員の言葉だけではなく、10歳の子ども、若手研究者、お年寄り、家事手伝い、作家、そして美術館の警備員の考えも知ることができる。

そうしてこのバルセロナのラ・カイシャ財団で開催された現代美術の展覧会⁽⁵⁾での事例に勇気とヒントを

得て、愛媛県美術館では2005年より、常設展示室を舞台に、コレクション展『なぞなぞ美術館』の試みを始め、2019年の夏で9回目を迎えた⁽⁶⁾。

2 なぜ、「常設展示」なのか

さて、2019年（平成31年度）に実施した『なぞなぞ美術館』の報告の前に、なぜ「常設展示」なのか、説明したい。次の声は今年度、『なぞなぞ美術館』の来館者から寄せられたものである。

コレクション展はどこの美術館でも少しまらな感じでした。しかし観光ついでにたまたま立ち寄ったこのコレクション展は、チャレンジしていて、面白くて驚きました。小さい子どもも連れていましたが、一緒に「発見」ある鑑賞ができて、お話ししながらみることができたのが、良かったです。松山に来たときは、また来ます！

各地の美術館で開催されている「常設展示」について、具体的にどういうところが面白くないのか、残念ながらこの来館者は語っておらず、また筆者も聞いていない。しかし自分一人、もしくは他者ととも常設展示室を訪れ、来館者が「発見のある時間」を持てた、「常設展示」がそのような「場」を提供出来たということは「博物館」として幸せではないだろうか。「常設展示」は企画展と違い、華やかさや話題性に欠けるところがある。しかし期間限定の企画展とは違い、いつ訪れても来館者を迎えてくれる（待っていてくれる）安心感がある場所でもある。また、その館のコレクションがメインなので館のオリジナル色が最も良く出せる。そして何より来館者の「発見」、つまり、来館者にとって、より豊かな「気づきと学びの場」を創造するために、「博物館」が繰り返しチャレンジ出来る大事な展示研究の場と筆者は捉えている。

3 平成31年度(2019)コレクション展『なぞなぞ美術館 ヒミツの呪文は「ミル・カンガエル・ハナス・キク」』

ここでは一番最近(2019年・夏)に実施した『なぞなぞ美術館』第9回目の試みについて紹介する。

- (1) 実施時期:2019年7月6日(土)～8月18日(日)
- (2) 開催場所:愛媛県美術館新館1階企画展示室1
- (3)『なぞなぞ美術館』の特徴

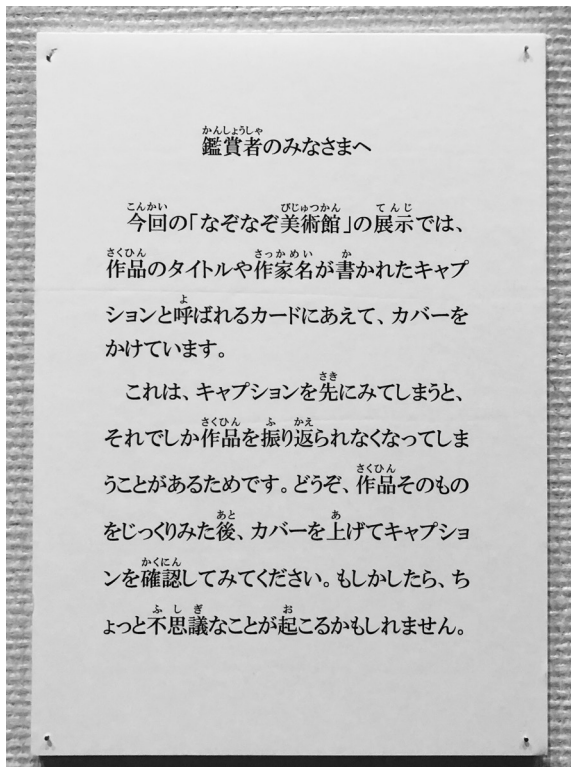


写真1 キャプションにカバーをかける理由

『なぞなぞ美術館』は文字どおり、「作品の謎をみんなで解き明かしていこう。“正解”はないかもしれないけれど」というコンセプトのコレクション展である。一番の特徴は、普段、作品のそばに添えられているキャプション(作品名や作家名、サイズ、使われている素材等が記されたラベル)や作品の解説文にカバー(写真1)がかけられており、その代わりに幼稚園生から高齢者まで、年齢も性別も様々な「来館者のその作品をみた言葉」が3～5つ添えられていることである(写真2・3)。

この3～5という数は第1回目からの試行の結果である。当初(2005年)は、来館者から寄せられた言葉を全て(最大20枚くらいまで)紹介していた。しかし読む方(来館者)も時間がかかり、ラベルを作る



写真2

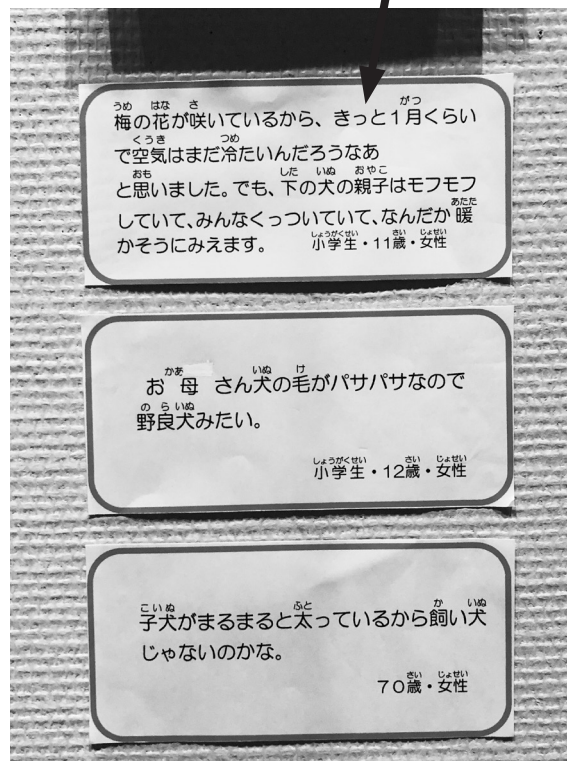


写真3 来館者の「発見」キャプション

方(美術館)も壁面のスペース確保に苦慮するという状態になり、当時別の事業で実施した来館者調査結果を参考に、来館者が一回のトライでストレスなく取り組みやすい数として現在はこの数に落ち着いている。

この「来館者の言葉」は展示室を訪れた来館者がそれぞれの気になる作品をみつけた後、展示室内に準備された「発見カード」に作品の感想を記入し、ポストに投函後（写真4・5）、美術館側で誤字脱字等、他の来館者も読み易い形に少し編集し直して紹介している（写真3）。



写真4

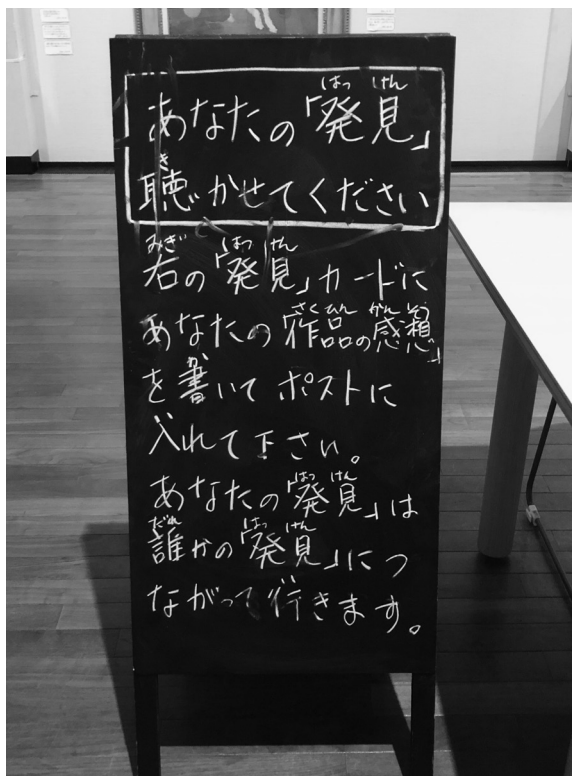


写真5

（4）第9回目の取組みで試みたこと

2005年を皮切りに、来館者の様子をみながら展示する作品やテーマについて試行錯誤を重ねてきた『な

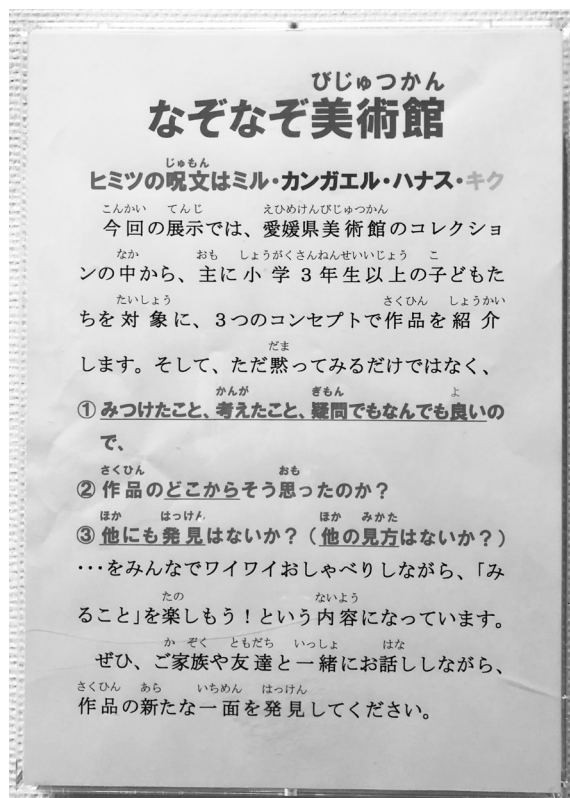


写真6 『なぞなぞ美術館』のご挨拶パネル

ぞなぞ美術館』であるが、今回は展示する作品を3つのコンセプトでくくり、構成していった（写真6）。

第1章のコンセプト「不思議な世界」では具体的には①野間仁根《魔法の森》(油彩・画布)、②畦地梅太郎《鳥のすむ森》(多色木版・紙)、③入江明日香《Magnoria Obovata》(銅版・コラージュ・紙)、④木村武山《羽衣》(紙本着色・屏風)、⑤遠藤広実《十六羅漢図》(絹本着色・軸)、⑥沖冠岳《百狸々図》(紙本着色・軸)、⑦畦地梅太郎《白い像》(多色木版・紙)、⑧真鍋博《靴の花》(油彩・画布)、⑨真鍋博《鉛筆の鳥》(油彩・画布)、⑩磯辺行久《WORK' 65-11~34》(油彩・麻布ほか)の順番に作品を展示した。次に第2章のコンセプト「動物観察」では、①北川民次《ロバ》(油彩・画布)、②沖冠岳《梅狗図》(絹本墨画淡彩・軸)、③小林古径《荒野》(絹本着色・軸)、④前田青邨《鯉三題》(紙本墨画)、⑤小清水漸《作業台 Blue Fish》(桂・塩地・群青)、⑥海老原喜之助《幸せな雪の村》(油彩・画布)、⑦白川義員《キャリブー》(写真・パネル)の順に作品を紹介した。そして第3章では「人間の姿をみてみよう」をコンセプトに、①古茂田公雄《炭鉱》(スクラッチング・紙)、②畦地梅太郎《山小屋の老人》(多色木版・紙)、③土佐光起《柿本人麻呂像》

(紙本着色・軸)、④安田靱彦《古事記》(紙本着色・軸)、⑤ピエール・ボナール《アンドレ・ボナール嬢の肖像—画家の妹》(油彩・画布)、⑥安田靱彦《守屋大連》(絹本着色・軸)、⑦長谷川竹友《霊峰 石鎚》(紙本着色・屏風)という順序で作品を展示した。なお、今回の展示は作品鑑賞の経験が恐らく初めてに近い小学3年生を主なターゲットに構成したため、24点の作品はほぼ具体的で描き込みが多い(視覚要素がある程度あり何が描かれているか分かり易いもの)、しかしよくみていくと「謎」—わからないことがあるものを選んだ。

そして、最初に見る作品よりは、2番目に見る(挑む)作品(謎)は、例えば背景等の描きこみが少なく、場所や状況がすぐにはわからないものを選び、来館者に更に作品をじっくりみてもらう(考えてもらう)よう努めた(写真7~13)。



写真7 展示室の様子・前半部分(各作品はコンセプトでくくりながら、いろいろな表現方法の作品を紹介した)



写真8 展示室の様子・前半部分



写真9 展示室の様子・中ほど



写真10 展示室の様子・中ほど



写真11 展示室の様子・中ほど



写真12 展示室の様子・後半部分



写真13 展示室の様子・後半部分

(5) 来館者からの『なぞなぞ美術館』への感想文

ここでは、第1回目から9回目まで来館者から寄せられた展示の全体的なことについての言葉を紹介します。

- ①「全体的に言えることなのですが、私は今まで作品を『題名』だけで見てきたのではないか、とはっとさせられました。この企画で美術館の新たな楽しみ方を発見したような気がします」。(20歳・女性)
- ②「ともだちと絵について思ったことをいいながらみました。たのしかったです。また来たいです。おとうさんとおかさんにも思ったことをいいたいです」。(7歳・男性)
- ③「みなさんの意見を読むことにより、「あーやっぱり」とか「そうだ」とか「フーンそんなんとらえ方もあるの」とか、共鳴したり教えられたりして身近に感じたり違った見方ができたり、少しスパイスを自分にプラスして絵の鑑賞が出来るという初体験。面白いナー

と思いました。

また楽しみにしています。この企画。(47歳・女性)

④「この企画いいですね。次回も楽しみにしています」。(52歳・男性)

⑤「絵のタイトルを読まずに作品をじっくり見ていると、色々想像しながら作品を見ている自分に気がきました。タイトルを見てしまうと想像したものと違ってると、つまらなくなりそうなので、今日は見ずに帰ります。タイトルを隠す美術展示は初めてでした。とても面白くていいなあと思います。また来たいですし、今後も続けてほしいです」。(44歳・女性)

⑥「コレクション展はどこ美術館でも少しつまらないと感じていました。しかし観光ついでにたまたま立ち寄ったこのコレクション展は、チャレンジしていて、面白くて驚きました。小さい子どもも連れていましたが、一緒に「発見」ある鑑賞ができて、お話ししながらみることができたのが、良かったです。松山に来たときは、また来ます!」。(28歳・女性)

4 いろいろなコレクション展の可能性—ベルナル・ビュフェ美術館『美術館に行こう! ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方』展

(1) 展示について

このようなコレクションを用いて、キャプション等のラベルを工夫し、「来館者の学びの場」を創っていくとする動きは各地の「博物館」で始まっている。

例えば静岡のベルナル・ビュフェ美術館では2019年4月20日(土)から9月29日(日)の間、オランダを代表するグラフィックデザイナーで絵本作家のディック・ブルーナが生み出した「ミッフィー」とともに同館のコレクション、ベルナル・ビュフェの作品をみつめる展覧会が開催された⁽⁷⁾(写真14・15)。同館はフランスの画家ベルナル・ビュフェの作品をその初期から晩年までたっぷりみることの出来る美術館である。

筆者は2019年秋にこのコレクションを使った展覧会を訪れた。実は愛媛県美術館でも過去に同企画でのコレクションを活用した展覧会を開催したことがある。しかし、ミッフィーを主人公にした絵本《美術館に行こう!》のあらすじに添って自館のコレクションを選び、展示を創ることは一見簡単そうにみえて、絵本に登場する作品とコレクションが必ずしもリンクすると

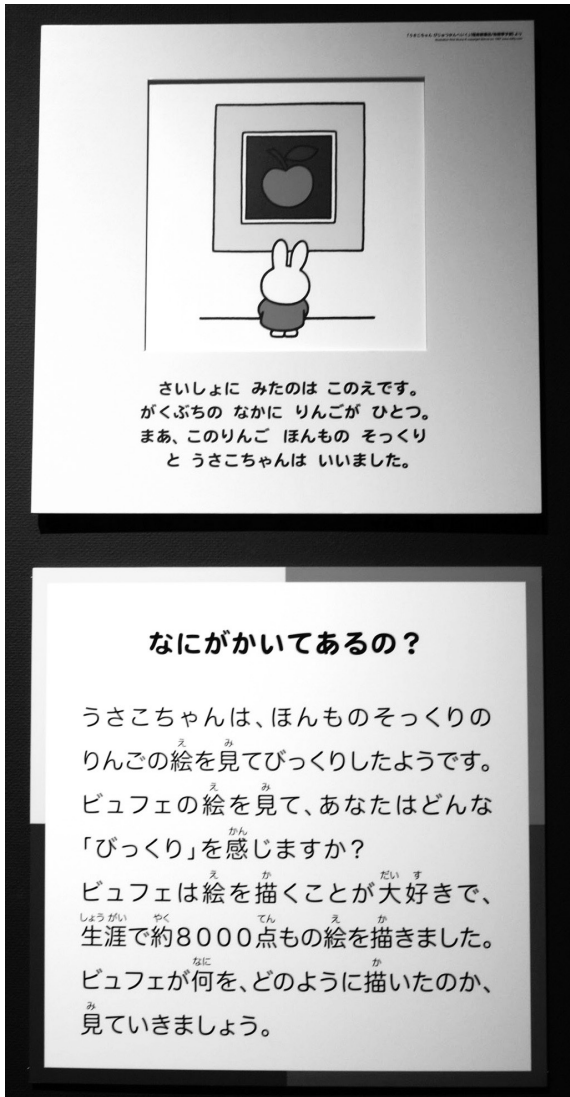


写真14 展示会の導入パネル ©Mercis bv

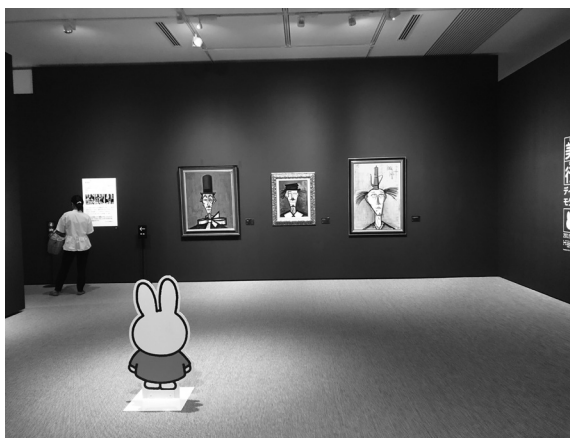


写真15 展示室の入口（プロローグ）の様子 ©Mercis bv

は限らないため、思いのほか苦戦した。そのため、ピュフェ美術館の、全てピュフェの作品で構成される「美術館へ行こう！」展がいったいどのような内容になるのかに興味を湧いていた。そして、みる事が出来て大変良かったと感じている。おそらく愛媛県美術館を始め、他の多くの館で実施された同タイトルの展覧会の中でも、今回のピュフェ美術館の展示室は、来館者にとって優れた「発見のある場」だったのではないだろうか。

まず、展示の全体的な印象を述べると、この展覧会の主人公ともいえるミッフィーと、ピュフェ美術館のコレクションが「対等な」関係で構成されていた。(写真15～20。上段がミッフィーの物語。下段がピュフェ美術館で考えられた章立てパネル)。同館の企画は「美術館が誰に対して、どのようなありたいか、その上でピュフェの作品—コレクションをどうみてもらいたいか」という美術館の主体性が明確であり、言葉は悪いがミッフィーの物語に強く引きずられていなかった(少なくとも愛媛県美術館で同展を開催した時は「美術館に行こう！」という絵本の再現性に力点を置き過ぎていた)。

少し展示室内の様子について紹介していこう。ピュフェ美術館で同展を担当したのはエドゥケーターの井島真知と雨宮千嘉の二人である。展示室の中では両名の担当者が「対話」を重ね、選ばれた「言葉」と分量による解説パネルもところどころで作品の近くに添えられていたが(写真21)、その内容は先ほどの章立てパネルと同じく、来館者に対して決して「問いかけ過ぎず」「説明し過ぎず」(過度な問いかけ、説明は来館者の思考停止につながる、しかし読んだ後は、来館者が再び作品に戻って考えていけるように創られていた。そのためか、当日作品鑑賞をしていた来館者の多くの様子を見てみると(おそらく筆者と同じようにピュフェの作品鑑賞が初めてに近い人々と思われたが)、展示室内は、ほど良い緊張感とともに「私(来館者)は受け止められている」といった空気感に包まれ、皆、終始、リラックスした表情で展覧会を楽しんでいた。

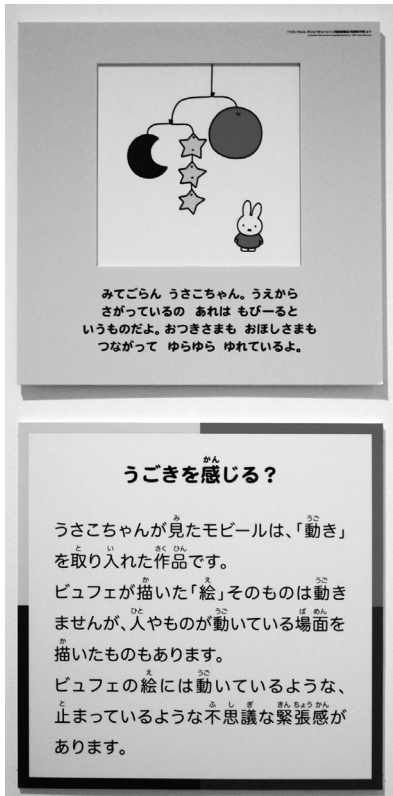


写真16 ミッフィーの物語（上段）とピュフェ美術館の章立てパネル（下段）。「物語」と展示されている「コレクション」の関係が「対等」であることが伺える。 ©Mercis bv

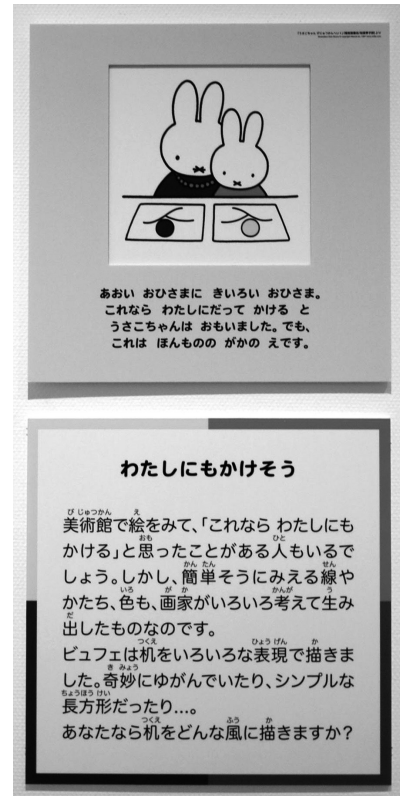


写真18 章立てパネル ©Mercis bv

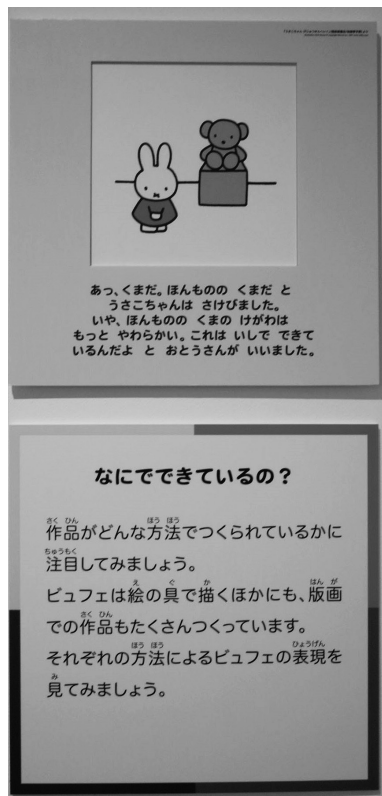


写真17 章立てパネル ©Mercis bv

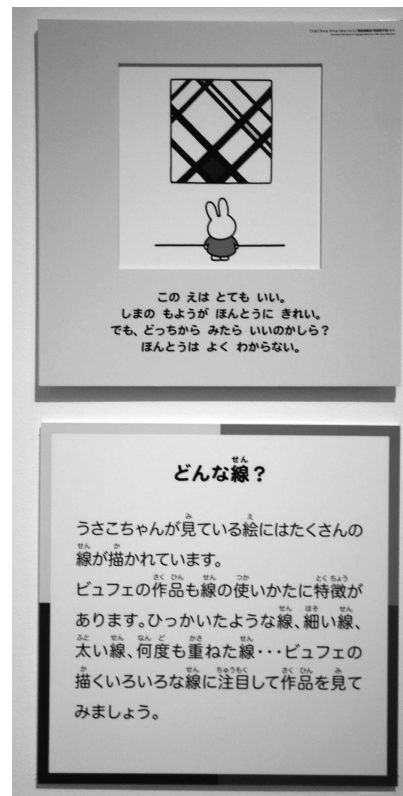


写真19 章立てパネル ©Mercis bv

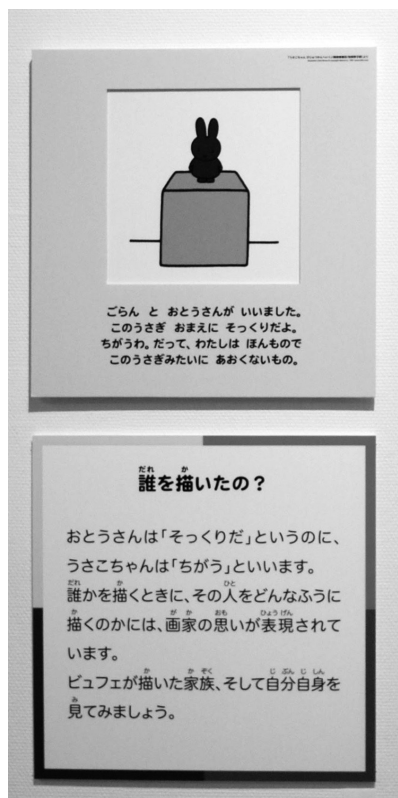


写真20 章立てパネル ©Mercis bv

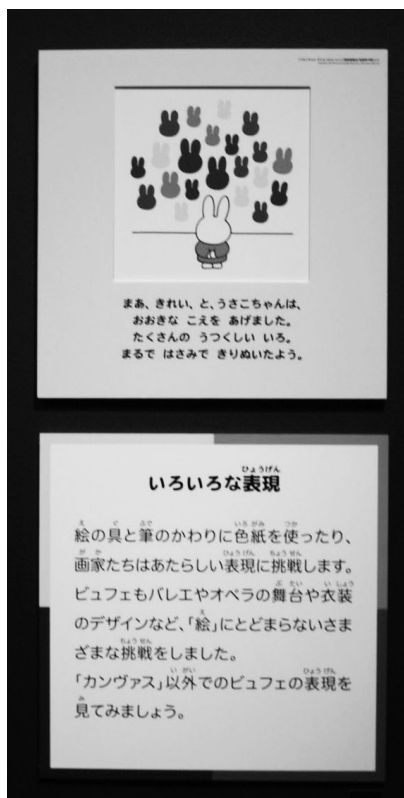


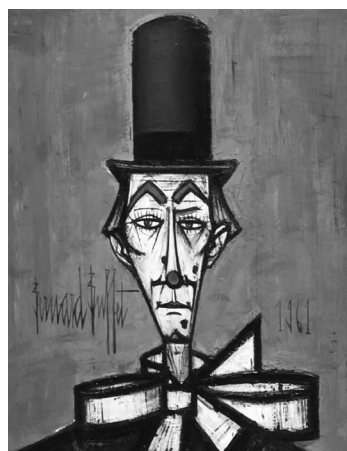
写真21 章立てパネル ©Mercis bv



《コーヒーポットを頭にのせたピエロ》
Clown à la cafetière 1995年 油彩・画布
116×81cm ベルナール・ピュフェ美術館蔵




《黒い帽子のピエロ》
Clown au chapeau noir 1966年 油彩・画布
65×50cm ベルナール・ピュフェ美術館



《ピエロの顔》
Tête de clown 1961年 油彩・画布
100×81cm ベルナール・ピュフェ美術館蔵

—ピュフェが描いたもの—
ピエロ

ピュフェはサーカスの絵を、そしておどけて観客を笑わせる役目のピエロの絵もくり返し描きました。ピュフェ自身がピエロのメイクをし、その顔を描いたりもしています。



自分の顔にピエロのメイクをするピュフェ (1968年)

ここにある3点のピエロの表情を見てみましょう。自分の気持ちがどうであれ、観客を笑わせなければいけないピエロ。それは悲しいことなのかもしれません。しかし、ピュフェはこんなことばを残しています。

“ピエロは変装したり滑稽にすることによって、自分を思いのままにすることができるのです。つまり自由なのです。”

—ピュフェの言葉より—

写真22 ピエロの作品の近くに添えられた解説パネルのうちのひとつ

(2) ワークシートプログラムについて

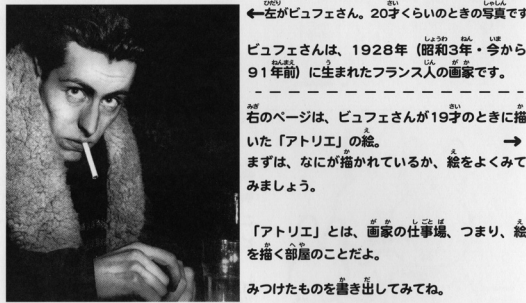
もうひとつ、今回のピュフェ美術館の展示室で「発見」したことがある。それは、同館のワークシートには作品と対峙した来館者に対し、「まずは、じっくりみてみよう」という問いかけが記されていることである。来館者が作品をじっくりみるための時間の確保である。実は至極当たり前のこの働きかけが、多くの「博物館」のワークシートで抜け落ちている。

筆者がこれまでみて来た限りでは、他館のそれは例えば「どんな音が聞こえてきそう?」「寒そう? 暖かそう?」「どんな気持ちかな?」等、最初にじっくりみることを促さず、(それは前提のこととされているのだろうか?) まだ作品をみてもいないのに、いきなり「問い」が始まる、あるいはキャプションに書かれた情報を書き写す、といった感が否めない。

このことについて同館のワークシートプログラムの趣旨を井島は次のように語ってくれた。

うちのワークシートは、本当に作品を見慣れていない人を想定しています。ですので、まずは描いてあるものを挙げる活動を通じてじっくりみてもら

おうというねらいで、特に第1問目は作ってあります。1問目からひとつずつステップを踏んでいくという感じです。



←左がピュフェさん。20才くらいのときの写真です

ピュフェさんは、1928年(昭和3年・今から91年前)に生まれたフランス人の画家です。

右のページは、ピュフェさんが19才のときに描いた「アトリエ」の絵。 →
まずは、なにが描かれているか、絵をよくみてみましょう。

「アトリエ」とは、画家の仕事場、つまり、絵を描く部屋のことだよ。

みつけたものを書き出してみよう。

右の絵に描いてあるものを書き出してみよう。

写真23 ピュフェ美術館のワークシート(第1問目のページの左側)

よ〜く見てみよう



この部屋の人(ピュフェ)はどんなふう(いちにち)に一日をすごしているんだろう?
絵に描かれているものをヒントに考えてみよう。

写真24 ピュフェ美術館のワークシート(同じく第1問目のページの右側)

現在、日本の「博物館」でも普及されている「対話型鑑賞」を最初に開発したニューヨーク近代美術館ではその開発過程で、美術館にやってくる来館者に対し、「美術と思考」についての大規模な調査を行っている。それによると美術館に来る来館者の約8割は「みることの初心者」であり、専門家等の来館者は2割にもみ

たないという結果が出ている⁽⁸⁾。筆者はこの結果はほぼ世界各地の「博物館」の来館者にも当てはまると考えている。とすれば、「博物館」が先ずやるべきことは明白ではないだろうか。

このビュフェ美術館のワークシートのような「まずは作品をじっくりとみること」を来館者に促すような方法は他にもある。例えば当館では「花鳥画」を紹介するコレクション展の中で、作品のそばに来館者が読み易い程度の字数のディスクリプション—作品を描写

した文章（この文章を読むことで自然に作品をじっくりみる時間を担保する）と、更にもうちょっとだけ作品を理解することにチャレンジ出来るような情報を（数は1〜2程度が良い）を記したパネル等を1つだけ設置し、他の作品も同様に楽しめるように誘う、というような試みも始めている。（写真25）



写真25 コレクション展「花鳥画—仮想の楽園」(担当:当館学芸員 五味俊晶)より

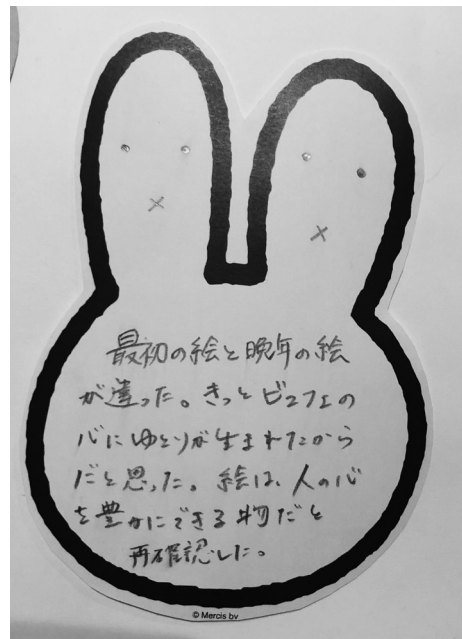


写真27 「発見カード」のひとつ

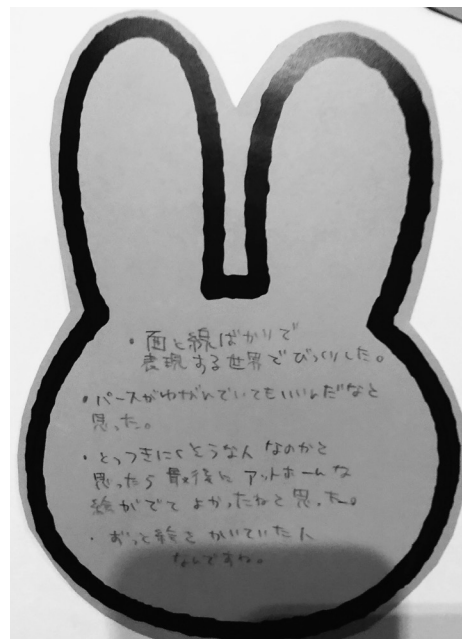


写真28 「発見カード」のひとつ

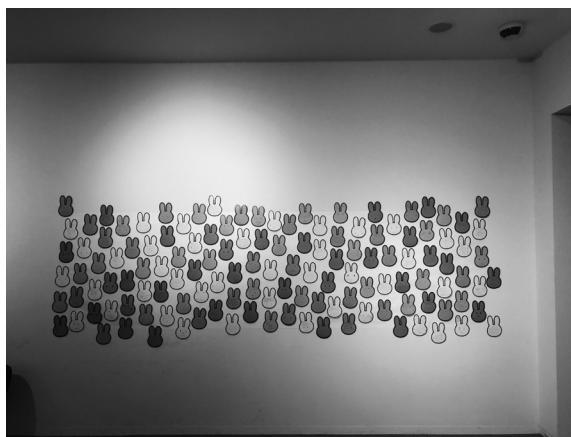


写真26 展示室の最後にある「発見カードコーナー」

今回のビュフェ美術館の展示は同館エドゥケーターのコレクションに対する「愛情」と来館者への「思い」がよく伝わって来る、ビュフェ美術館の強みを活かしたとても「面白い」企画であったと思う。このことは展示室の最後のコーナーに準備された、来館者が記した数々の「発見カード」(写真26～28)からもよく伝わってくる。そこには、

- ・最初の絵と晩年の絵が違った。きっとビュフェの心にゆとりが生まれたからだと思った。絵は人の心を豊かにできるのだと再確認した。
- ・面と線ばかりで表現する世界でびっくりした。
- ・パースがゆがんでいてもいいんだなと思った。
- ・とっつきにくそうな人なのかと思ったら、最後にアットホームな絵が出てよかったねと思った。
- ・ずっと絵をかいていた人なんですね。

というような、ビュフェの作品を「みる」ということを「発見」した、たくさんの来館者の声が寄せられている。今後も同館のコレクションを用いた、「展示」の企画について注目していきたい。

5 キャプションも来館者との「対話の場」

本レポートの「はじめに」で述べた「対話型鑑賞」について筆者が学び続けている京都造形芸術大学教授の福のり子は、度々その講演の中で来館者がひとつの作品にかかる鑑賞時間（10秒前後）について紹介している。2019年秋に東京大学情報学環・福武ホールで開催された福の講演会に参加した島根県安来市加納美術館理事の千葉 潮は講演後、同館のキャプションを工夫する試みを始めている。その様子について同館の企画展で「対話型鑑賞」を開催している島根県出雲市立湖陵中学校教頭の春日美由紀は次のように述べている⁹⁾。

美術での展示にも携わる千葉は、福のキャプションと作品との鑑賞時間の差異の話に衝撃を受けている。鑑賞者に良かれと思って説明事項を増やすことが逆に「作品をみない（作品をみる時間を奪っている）」という実態につながっていることを知り「ショックだった！」と述べている。そして現在展示中の企画展では、館内関係者の不評にも負けず、極めて簡略化したキャプションに挑戦した。筆者も来館し、鑑賞したが、シンプルな情報提供で作品（陶

器の茶碗が中心）ファーストになっており、作品そのものに向き合えた。千葉自身、来館者が作品と対峙する時間が増えているように感じるとも述べている。

後日、この春日の報告に対し「キャプションも他者なのだと気付かされました」と京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター研究員の三重野優希から感想が寄せられたという。更に「キャプションを作成しているのは各館の学芸員の方々であり、そうしたキャプションの向こうに在る“他者”の存在に来館者が気づけると、来館者がキャプション（ひいては、美術館）に感じている権威的な認識が変容するのではないか。もともとキャプション（ひいては美術館）に権威があるのではない。実はそうってしまう“私”と美術館の間に“権威を生む関係”が生じている。つまり“私”も美術館を“権威的”にしている一部である、と気づけると、“来館者である私”が美術館に一方的に権威を感じる、その関係性が変わっていくのだと思いました」と三重野は語る。

近年、「博物館」ではこれまで無記名だった展覧会担当者の名前やその館で働く学芸員を紹介するキャプションやパネルを少なからずみかけるようになってきている。先日も、埼玉県立歴史と民俗の博物館で、ある試みを目にした。そこには館内の飲食禁止を知らせるピクトグラムサインに、もう一工夫、なぜダメなのか、飲食するとどうなるのか、その理由と資料保全の協力を伝える言葉が添えられていた。来館者からは「わかりやすく良い」と好評を得ているという。愛媛県美術館でも、館内のマナーについて、これまで来館する小中学校の子どもたちやホームページ内では、その理由も添えて説明を行ってきた。けれども館内のサインにはそれは一言も書かれてはいない。筆者は、大人、つまり一般の来館者がその理由を必要としているとはこれまで思いも寄らなかった。しかし少し想像すれば、「ダメ」の一辺倒ばかりでは、相手はそこから次に何が起こるか考えられず、結果、行動はいつまでたっても変化しないのである。

こうなってくると、これから「博物館」がしなければならないことはとてもはっきりしている。館内のキャプションもサインも全て来館者との「対話」の場といえる。マナーのサイン改善については、まずは新年度より来館者にその理由がはたして現状どこまで伝わっているのか来館者調査を行うところから始めたい。

そして来館者の持っている力を引き出すための展示の可能性について、今後も探り続けていきたい。

註

- (1) 美術館・歴史系博物館・自然史博物館・科学系博物館・水族館・動物園等は同じ博物館群であるため、ここでは「博物館」とした。
- (2) 拙稿「研究ノート ビジターへの学習活動の支援～インタープリテーションの意義～」『愛媛県総合科学博物館研究報告』第1号(1996、愛媛県総合科学博物館) pp.51-56、拙稿「博物館見学プログラム “さがしてごらん、カミさまはどこにいる？” -子どものための教育活動の試み-」『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第4号(1999、愛媛県歴史文化博物館) pp.126-131、拙稿「国宝 鑑真和上展 小学生のための展示プログラム「あきらめなかった人の顔」の実践から(報告)」『愛媛県美術館研究紀要』第4号(2004、愛媛県美術館) pp.31-50、鈴木有紀・田代亜矢子・西田多江・長井建編集『平成18年度文化庁芸術拠点形成事業 博物館教育シンポジウム ともに見る、ともに学ぶ 利用者との「対話」からはじまる展示プログラム～ワークシートを中心に～(報告書)』(2007、愛媛県美術館)、拙著「愛媛県美術館博物館小中学校共働人材育成事業実行委員会執筆協力『教えない授業 美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方』(2019、英治出版)、鈴木有紀・田代亜矢子編集『平成30年度文化庁・地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業 えひめ「対話型授業」アウトリーチプロジェクト 先生のための対話型授業のススメ』(2019、愛媛県美術館・博物館・小中学校共働人材育成事業実行委員会)
- (3) 愛媛県美術館では2006年より京都造形芸術大学の福のり子教授より対話型鑑賞を学び、以後、同大学アート・コミュニケーション研究センターが開発した「みる・考える・話す・聴く」を基本プロセスとし、推進しているアート・コミュニケーション・プロジェクト(通称ACOP)の考え方を取り入れている。
- (4) アメリア・アレナス著 木下哲夫訳『みる・かんがえる・はなす・きく 鑑賞教育へのヒント』(2001、淡交社) p167
- (5) アメリア・アレナス著 木下哲夫訳、前掲、(2001、淡交社) 註Ⅲ、第7章4。
- (6) 以下は全て第一回目の「なぞなぞ美術館」で試みた展示方法を踏まえて、改善・継続してきたコレクション展である。

愛媛県美術館平成17年度年報p.21「特集展示 なぞなぞ美術館」、愛媛県美術館平成18年度年報pp.21-22「特集展示 なぞなぞ美術館Ⅱ 何してるの?」、愛媛県美術館平成19年度年報pp.14-15「特集展示 なぞなぞ美術館Ⅲ—「わたし」の視点からはじまるミニ展覧会、愛媛県美術館平成22年度1年報p.9「なぞなぞ美術館Ⅳ—Landscape《風景画を楽しもう》」、愛媛県美術館平成23年度年報p.12「特集展示 なぞなぞ美術館Ⅴ—日本美術を楽しもう!」、愛媛県美術館平成26年度年報p.8「美術館に行こう!ディック・ブルーナに学

- ぶモダン・アートの楽しみ方」、愛媛県美術館平成27年度年報p.11「特集展示 What't going on in this picture? どこからそう思う? -小学生のための美術鑑賞」、愛媛県美術館平成28年度年報p.5「特集展示 What't going on in this picture? どこからそう思う? -中学生のための美術鑑賞」、愛媛県美術館イベントスケジュールみるん・するん2019.4-9(前期)コレクション展「なぞなぞ美術館—ヒミツの呪文は「ミル・カンガエル・ハナス・キク」」
- (7) ベルナル・ビュフェ美術館企画展『美術館に行こう! ディック・ブルーナに学ぶモダン・アートの楽しみ方』
 - (8) アビゲイル・ハウゼン「美的発達インタビュー (Aesthetic Development Interview)」、カリン・デ・サンティス、アビゲイル・ハウゼン著「発達理論と美的発達に関する概論」『連続セミナー ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー Step1 課題テキスト集』(2011、VTSジャパン実行委員会・福のり子 板井由紀 北村秀之 伊達隆洋) pp.30-31
 - (9) 春日美由紀、講演会レポート「アート&コミュニケーションで鍛える先がみえない時代のサバイバル術」(2019年11月17日(日) 東京大学情報学環・福武ホール 福竹ラーニングシアター講師: 福のり子 伊達隆洋 平野智紀(総合司会)、(京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター ARCHEIVS レポート紹介 2019.12.30)

資料協力

ベルナル・ビュフェ美術館 エデュケーター井島真知